

オンライン多読教材を活用した授業と 英語文学作品への導入効果

松本 美千代

要旨

英語で書かれた文章を読むことに苦手意識を持つ学生が、授業において楽しく効果的にリーディングを進める可能性を広げる授業形態についての実践報告である。手法としては、1) 学生が楽しく進められるマテリアルと手法を探すこと、2) 学生の授業参加への動機づけを持続させる工夫を用いること、3) 読む作業が楽しいものでありながら、深い内容理解に基づき、さらにその作業が評価対象になる方策を設けること、4) 授業内でのリーディングに係わる経験が、精神的負担を与えるものや、評価対象の作業ではなく、今後のより深い英語文学作品への好奇心と可能性を広げる効果を持つように指導すること、などの方針に基づき授業を計画した。時間の制約上、課題も残るが、リーディングへの動機づけが高まり、多くの学生たちが英語への否定的な抵抗感を減らし、教員の誘導ではなく、自律的にリーディング教材のレベルを英語文学作品に求めるような効果が見られた。

I はじめに

2017年度特別研究費を得て、オンライン多読教材の一つである X-Reading を活用し多読の手法による作品読解の指導を人間科学部2年生の学生を対象に実施した。成績評価の方法の明確化、授業内作業のテンプレート化、段階的に難易度を高める工夫、その他安心して読むことに取り組むことができる環境の維持など、いくつかの方策と組み合わせで試みた結果、学習者の英語作品への学習意欲の向上、英語で書かれた物語への苦手意識の改善が見られ、英語が苦手な学生であっても、英語による読書を継続的に行うことにより、読書量の蓄積とともに、英語作品への取り組みを肯定的に捉える傾向が確認された。とくに、今回の指導においては、読書した作品を英語でブックレポートにまとめるライティングを併用したことにより、学習者が主体的に作品の内容に関与し、レベルにかかわらず既知の文学作品に挑戦したり、より楽しめる作品を選択しようとする兆しが見られ、作品とのかかわりが質的に向上したと言える。ブックレポートの効果としては、語彙力の定着化をはじめ、内容を自身のことばで忠実に伝えたいという動機から、文法、構文に対してもより正確さを意識する傾向が見られた。本論では、このようなオンライン多読教材を活用

した授業の実践方法の紹介と、英語文学作品への緩やかで自律的な導入効果について概括する。

受講者は人間科学部の2年生の26名で、英語のレベルは中級とされるが、前年度初級に所属していた学生も少なくなく、また、人間科学部の学生は物語への関心は高いものの英語への苦手意識がとくに強い傾向も以前から指摘されており、別紙資料の学生のコメントに示唆されるように、滑り出しは決して順風と言えるものではなかった。一般的に学習における内発的な動機づけには「有能性」「自律性」「関係性」の3つの構成要素が積極性を高めると言われるが^①、いずれの要素においても充足していないスタートであったように見える。しかし、授業方法などにおいては、途中いくつかの課題はあったものの、最後のコメントには、英語で書かれた作品を読み通した経験はなかったが、「今後もっと読んでみたい」、あるいは「読むことができるという自信がついた」、「文学作品の方がおもしろかった」、「もっと難しい作品に挑戦したい」「読む速度が上がった」、「英語で書くことに抵抗がなくなった」、「A4で2枚以上書けるようになった」など、達成感や有能性に関する肯定的なコメントが数多く見られるようになった。読んだ内容をしっかりと伝えたいという意欲から、書くことを通して、徐々に文法や語彙についても意識的になり、さらには他の英語の授業においても、抵抗なく英語に取り組む気持ちになれたという副次的効果も得られたようである（【資料4】）。

Ⅱ オンライン英語教材 X-Reading の概要と活用法

X-Reading は、マクミラン、オックスフォード、ケンブリッジ、ナショナル・ジオグラフィック、センゲージ出版社などの 800 冊以上のグレイディッド・リーダーズを所蔵し、多読による英語力の向上を目指すオンラインのリーディング・サイトである。学生は半年 1400 円程の購読料^②で無制限にアクセスできる。今回、教室は PC 教室を使用した^③が、PC 以外にも、スマートフォンなど様々な端末を用いてのアクセスが可能であるため、場所を選ばず、授業外の自宅学習として、また隙間の移動時間などでも教材に触れることができる。くわえて、多くの教材が音声化されているため、立ち止まることなく一定の速度を保ちながら読み進めることができ、読む力だけではなく、発音の確認、シャドーイングなどリスニングの力も強化できる利点がある。X-Reading の購読料は、CD 付きでないグレイディッド・リーダーズ約 2 冊分の価格相当であるが、試読ができることも、作品と読者との関係性を作る意味で効果的であり、さらに途中でレベル設定を変更することができることも、読者の心理的負担の軽減につながり、作品や英語への苦手意識を低下させる要素として重要である。

教員側には、学生の進捗状況を確認することができるモニタリングシステムが整備されている。読書量を示す文字数、講読速度、巻末クイズの解答および結果と正答率、本の読書進度、書籍の難易度、講読冊数、講読時間などを、オンラインとエクセルで管理するこ

とができる。巻末クイズは、学生には解答が示されないため、不正解となった問いについて個別に教員が解説することで、互いに作品を理解しながら教員と学生との関係性を深める機会につながる。また、各受講者の読書冊数を全員に公開するという方法によって、学生同士の競争意識を高める効果と、作品に取り組む意欲がお互いに高められた。今回は仮に、受講者全体で1学期に500冊読む目標を立て、あと何冊各自が読めば、目標冊数に到達するという声掛けによって各学生がチームの一員という意識を持たせるよう心掛けた。目標には及ばなかったものの、クラス全体の総読書冊数は455冊で、1学期に1人あたり平均17.5冊を講読した。無論、読書冊数と読書の質についての教育効果については検証する必要があるが、初期段階である程度の冊数を読破する経験は、次のレベルの作品群に挑戦する自信や意欲には欠かせない過程ではないかと思われる。

前述したように、学習者の能動性、主体性、自主性という一般的に多読における効果的な指導法に則すれば、学生に作品を選択させるという要素も重要なプロセスである。X-Readingではレベル別、ジャンル別、タイトル別に検索でき、学生が作品を自律的に選択できるようになっている。また、表紙の挿絵や写真、既読者による評価点、オーディオ音声の録音時間から推測される講読時間、英語で書かれた作品の概要なども、選択のヒントとして有用であったようである。

Ⅲ 具体的な指導法の効果について

受講者のアンケートにあるように、授業開始時の受講者たちは、英語に対する苦手意識が高く、英文を読み、英文でアウトプットする授業方法に抵抗を示していたため、まずは少なくとも1作品を読み、短いブックレポートを書かせることから始めた。ブックレポートの導入の理由は、読書した内容を確認する目的と、読書の結果を評価することを明確にするためである。作品を読んでいるかどうかの確認は、内容理解に関するクイズなどでもできるが、正否を問う方法よりも、読んだことを伝えることから先ずははじめ、伝えたことが評価されるという仕組みを作ることが目的であった。第1回から5回の授業の初めの30分は、ブックレポートを仕上げるための文章構成に関する指導に費やした。ブックレポートの形式も平易なテンプレート型ワークシートから、少し難易度を上げたもの、そして白紙のA4用紙へと、難易度を変えながら段階的に導入した。第6回授業からは、ブックレポートの評価点数を明示し、平易版シートについては使用可能としたが、白紙から書き上げるブックレポートよりは得点が低くなる設定とした。平易版を複数書いて得点を伸ばす方法もあるが、簡易ワークシートの構成を白紙に書き写しながら論を進めれば、ブックレポートが完成していくことを学生たちは学んでいき、次第に平易版の利用は減少した。

ブックレポートの構成については、導入あるいは読者への問いかけ、あらすじを含む展開、作品における問題提起、そして読者としてオーヴァービューとコンクルージョンを含むように指導した。とくに、トピック・センテンスと段落を構成するサポーティング・セ

ンテンスについては、例示しながら繰り返し指導した。第7回目の授業から、ブックレポートをワードで提出することも推奨したが、ワードで提出する学生は常に2～3名ほどであった。

第6回目の授業以降、次第に学生たちからの質問が少なくなり、作品を各自選び、自主的にブックレポートを書けるようになった。教員は、巡回して、ライティングの様子を見ながら、文法や文章表現についてのアドバイスをしたり、物語について各学生が発見したことについて耳を傾けたり、筆が進まない学生の指導を行った。学生のレポート執筆のスピードがアップするにつれ、教員は提出されたレポートを読み、フィードバックし、記録をする作業も多くなりはじめた。人間科学部の学生は、物語に共感し、自分の伝えたいことをしっかりとレポートに反映させたいと考える傾向が高かったため、フィードバックについては、語句や文法の修正という観点ではなく、書き進めた努力への称賛や、レポート内容における視点や着眼点などについて教員が理解していると伝えることに重点を置いた。童話を中心に読み進めていた男子学生が、童話には非道徳的な内容が含まれるため、安易に子どもに読ませるべきではないと持論を展開するなど、苦手な英語の授業でありながら、作品の内容に意識が向かい、学習の動機づけが高まることは、英語が苦手な学生にとっては望ましい傾向であった。

第7回授業以降より、学生には変化が見られた。その一つは学生からもっと読みたいという意欲が聞こえ始めたことである。課題を自主的に授業外でやってくる学生も現れ、ライティングの分量もA4で2枚に達するケースも出始めた。作品の内容に疑問を持ったり、作品のエンディングに納得がいけない場合など、教員に内容を語りたくてうずうずしたという声も聞こえた。また、授業時間内に読み終える作品という条件で本を選択すると、簡単な作品を選択しがちであるため、読んでみたい英語文学作品や既知の長編小説にチャレンジしても良いかという質問、ライティングの時間を長編講読に充てたいといった希望も寄せられた。他方、授業の目標としては、作品について各自に発表させることを計画していたが、発表よりは本をたくさん読むことを優先させたいという学生たちの強い希望により実施に至らなかった。指導的観点から見ると、英語文学作品を教員側から積極的に進めるのではなく、学生自身が基礎的な作品ではあってもいくつかの作品を読破した後に、自発的に次の作品へと挑戦する自律性が育まれた過程が、文学作品へのアプローチとして意義深い点ではないかと思われる。

IV アンケート結果の概要

授業第1回目と第14回目に同じアンケートを行った。設問は全9問で、先行研究^③に基づき、英語教育開発センターの坂本教授、山内専任講師によって作成していただいた。内容は以下の通りである。①英語の本を読むのは好きだ。②英語でも、やさしい本なら一冊読み通せると思う。③英語の本を読んで視野を広げたい。④英語の本をもっと簡単に読

めるようになりたい。⑤日常生活や将来においても役に立つので、英語で読むことは大切だと思う。⑥英語のやさしい本をたくさん読めば、英語力が向上すると思う。⑦英語の多読をするのに、紙の本よりも X-Reading のようなオンラインの本の方がやる気が増すと思う。⑧X-Reading はスマホでも読めるのでパソコンよりスマホで読みたい。⑨英語を読む力が伸びれば、英語がもっと好きになると思う。

アンケート結果では、①「英語の本を読むことは好き」である割合に大きな変化は見られないが(19%→34%【資料 1-1】)、学生からのコメントにおいては、継続して読んでみたら、読めることに気づき、結果的に英語に対する苦手意識が薄れたというコメントが多く見られる。②の質問では、「本を読み通せると思う」という割合は「とてもそう思う」は19%から45%に上昇し、読むことに自信を持つようになったことが窺える。③の「英語の書籍によって視野を広げたい」に関しても、「とてもそう思う」、「そう思う」を合わせて49%から70%に上昇した。④の「英語の本をもっと簡単に読めるようになりたい」については、肯定的意見が4%減少した。⑤の「英語で読むことの将来的意義」については9割の学生が同意している。読むことは好きではないが、必要性は感じているということであろうか。⑥の「やさしい本と英語力向上の相関性」については、84%から62%と減少したが、もう少し難しい作品を読みたいという学生の意見や、ライティング作業に授業の半分を費やしたことから、さらなる検証が必要である。⑦の「紙媒体より X-Reading のオンラインの本の方がやる気が増す」についての肯定的評価は、76%から100%に上昇した。【資料 4】のコメントにあるように、紙の教科書には強制的な印象を持ち、オンライン教材は受け入れやすいという意見には、X-Reading の場合、異なるレベルや作品を選ぶ自由度が高いという要素も働いているであろう。自身で作品を選択するスタンス、また今回は費用も無料であったことも奏功したと考えられる。⑧の「スマートフォンを利用媒体としたいか」については、72%から54%に減少した。はじめ学生たちはスマートフォン上で利用できることに強い関心を示していたが、PC 上での講読を継続するに従って、文字の大きさが見やすく、広い画面で読み進めることができるパソコンの方が集中でき、優位性があると判断したように見える。⑨の読む力と英語への関心の相関性については、91%から88%へとダウンしたが、ライティングを併用した授業形態であり、書く力が向上したというコメントもあることから、ライティングと比べ読むことに対する負担感は依然として残っているということではないかと思われる。

今回はアンケートと同時に5分間ライティングを実施し、英語運用能力の向上とアウトプット能力の伸長を期待したが、大きな変化は見られず、明確な結果は得られなかった。

【資料 2】にあるように、かなりの分量を書けるようになった学生もいるが、極端に書けなくなった学生も存在する。1回目と2回目に異なるテーマで書かせた点と、テーマ設定の適切性の問題もあり、この測定法が適切かどうかについての判断も今後の検討課題である。

【資料3】にも見られるが、X-Reading を利用した多読についてのアンケート結果は、1月の評価の方が高く、学生たちにとって効果を感じられた学習法であったとすることができる。受講者たちは、はじめは抵抗を持ち、不安や戸惑いを感じていたと述べているが、英語で書かれた本を読んだ（読み通した）経験の少ない学生たちが、「親しみを感じることができた」「徐々にスラスラ読めるように」「楽しくなってきた」「時間あるときは、X-Reading を開いてみよう」「もう少しレベルの高い作品を読んでみようと思う」など、肯定的な印象を持ち、自主的に前向きな学習意欲さえも見せるようになったことは成果の一つである。それは自分自身で、多様な作品から毎回作品を選択する能動性がそのような結論を導き出すのかもしれない。「今年でも来年でも英語の一部のクラスのみではなく、他のクラスの人も利用できるようにするのは良いのではないのでしょうか」と、他の授業においても導入を奨励する意見も見られた。

V おわりに

今回は、読んだことを言語化してアウトプットする作業を通じ、英語で書かれた作品、あるいは文学作品への理解を深め、作品についての意見を形成することにつながる指導案を策定した。アウトプットが評価されるという仕組みにすることにより、学生たちの読書への意欲を高めることにつながっている。学生たちのコメントには、他の英語授業においても、苦手意識が低下し、英語で伝えることに抵抗を感じるものが少なくなったという肯定的なコメントも見受けられる。評価の方法など、改善点はあるものの、英語が苦手な学生に、物語の内容を楽しみながら、多くの語彙に触れさせ、それをもとにアウトプットにつなげていくというサイクルを継続することは、英語学習におけるモチベーションの向上に有効であると言える。

X-Reading を使用した英語学習は、内容学習と英語の語学学習を統合した英語教育法である CLIL とも共通する観点で、英語教育の質的向上をもたらすものとして期待される。グレイディッド・リーダーズは文学というオーセンティックな素材を活用して、文字だけではなく音声や画像などの視覚による情報を付与することにより、内容へのアクセシビリティを高め、内容の把握を深める効果を持っている。単語の暗記ではなく、何度も出てくる単語から単語の意味を暗記し、文脈の上で理解した単語を、次には書くという作業を通して自分の言葉に変えていく。内容を自分なりに表現するために考え、単語を応用し、英語を使いながら作品の評価を創造していくという手法は、継続することによって効果をもたらすと考えられる。

リーディング中心の授業は、教員と学生との関係性においても新しい展開があった。内容重視の教材によって学習への動機づけが高まり、授業は学生の作業中心となるため、教員と学生のインターアクションは、作品の内容についてのより深い理解を助けるためであったり、自分自身の考えを英語で適切に伝えるための、積極的で必然的な、表現や文法に

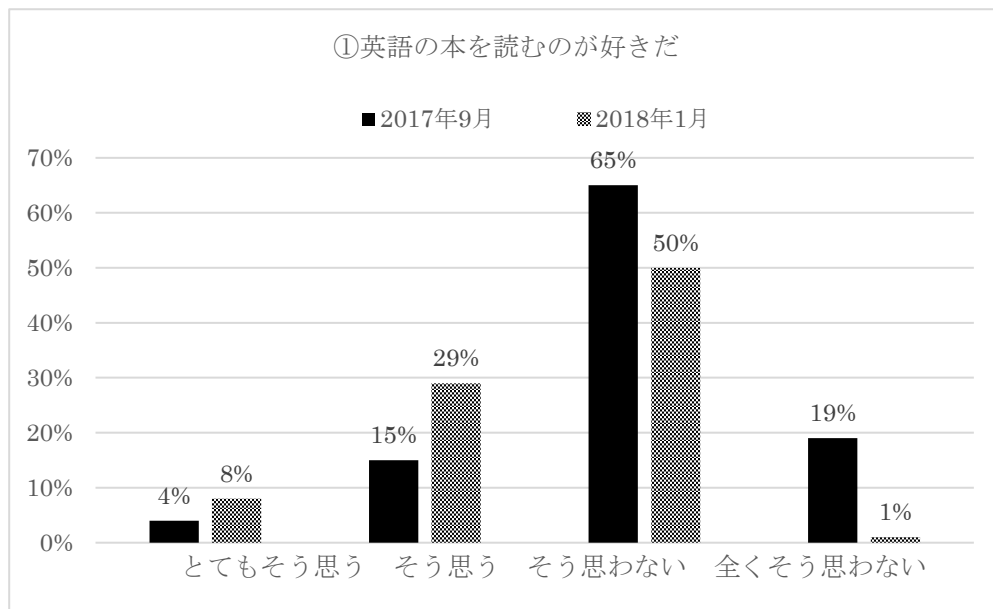
関する問いであり、テスト対策のための質問内容とは本質的に異なるインターアクションとなった。反面、教員と学生との関係性が中心となり、学生通しの協働という作業に時間を費やすことができなかった。今回は「読むこと」と「書くこと」の2技能を中心に指導を行ったが、今後はスピーキング、リスニングの技能を高められるよう、発表やディスカッションのような教育方法を工夫して展開すれば、英語教育の4技能の強化に加え、学生同士の協働学習を、本質的にまた有機的に統合できる可能性を持つ指導法に発展していく可能性がある。

英語で書かれた物語を自ら選択して読み、知識を得ながら、自らの思考力を用いて表現力を高めるオンライン教材を使用した教授法は、学生たちのより深い英語の学習へと導く有効な手段である。段階的に難易度を調整すれば、物語の面白さや、より難易度の高い文学作品への導入が可能になる。また、英語で書かれた物語を使って英語を学ぶことは、オーセンティックな英語に触れるだけではなく、学習者が異文化の考え方に触れる機会ともなり、言語学習の体験を通して、異文化の慣習、伝統的価値観や土壌、時代背景、歴史などといった異世界に視野を広げる出会いとなると同時に、グローバルな普遍的価値観を体験する奥深い学習活動であると言える。

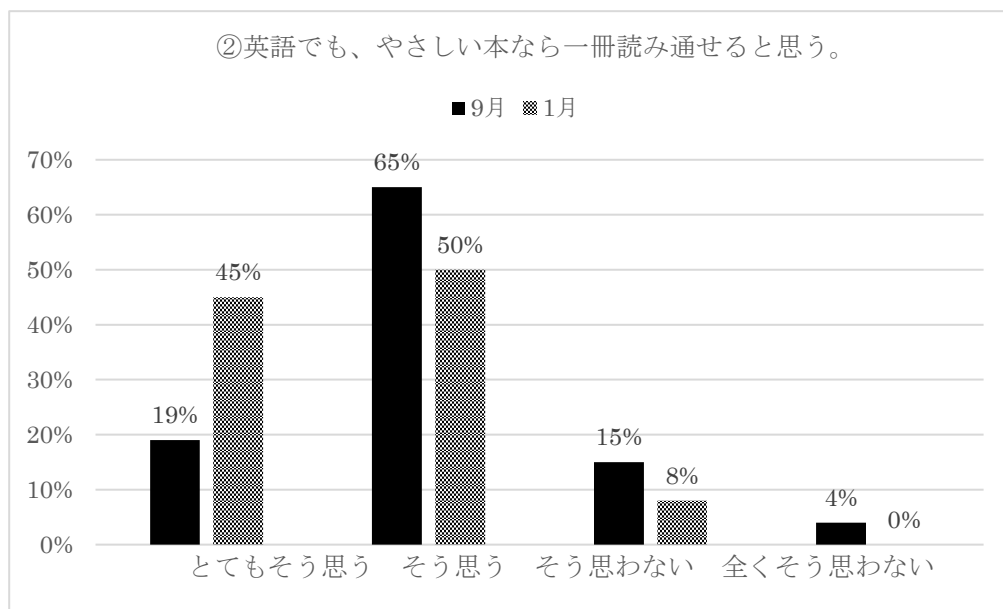
注

- (1) Deci, Edward L., and Richard M. Ryan. *Handbook of Self-determination Research*. University of Rochester Press, 2004, p 49.
- (2) 大学やグループ購入の場合 20%の割引が適用され 1 人あたり 1200 円の購読料となる。年間購読料は 2500 円で、グループ購入の場合 2000 円である。(2018 年 3 月 18 日 X-Reading ホームページの情報による。https://xreading.com/pages/helpcenter/subscription_rates)
- (3) Takase, Atsuko. "Japanese high school students' motivation for extensive L2 reading." *Reading in a Foreign Language*. April 2007, Vol 19, No. 1. pp.15.

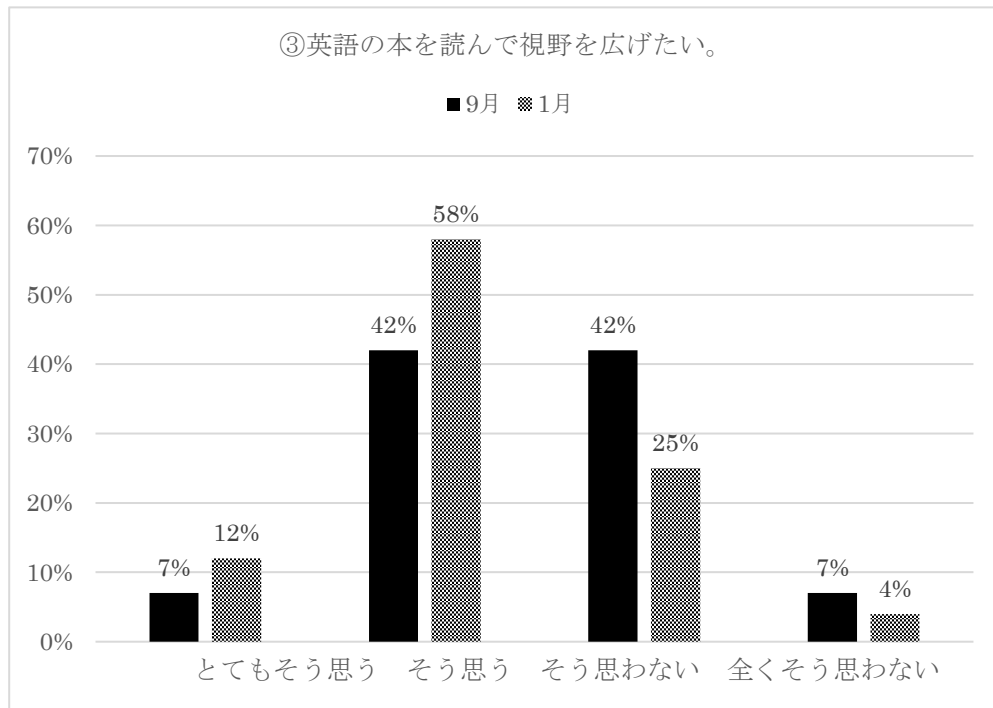
【資料 1-1】



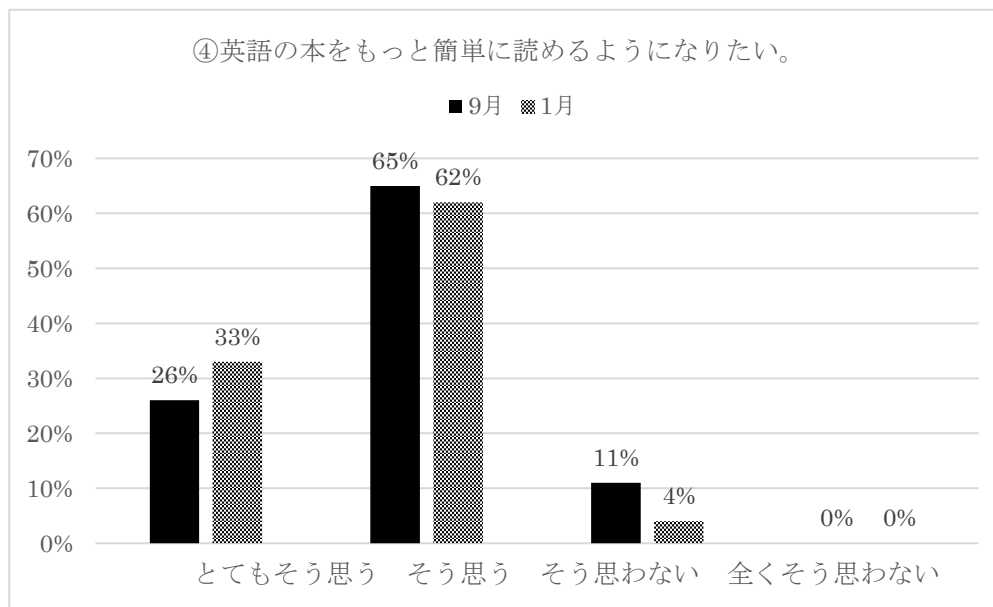
【資料 1-2】



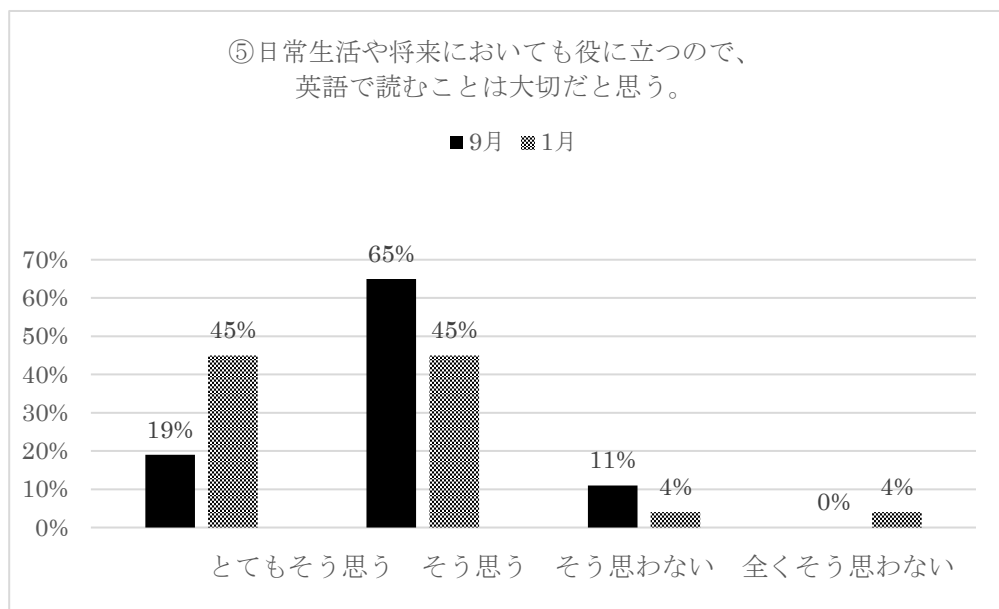
【資料 1-3】



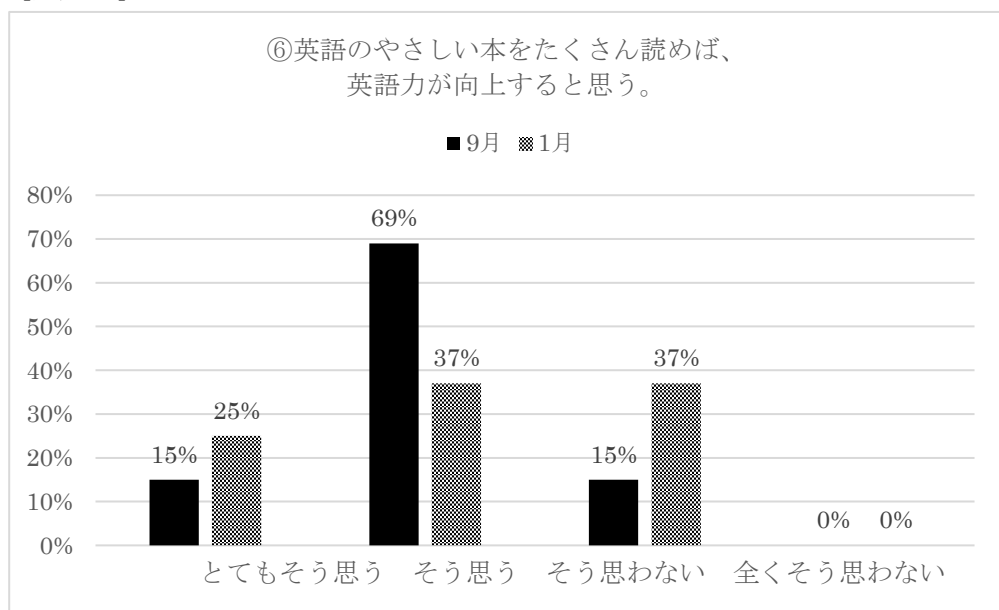
【資料 1-4】



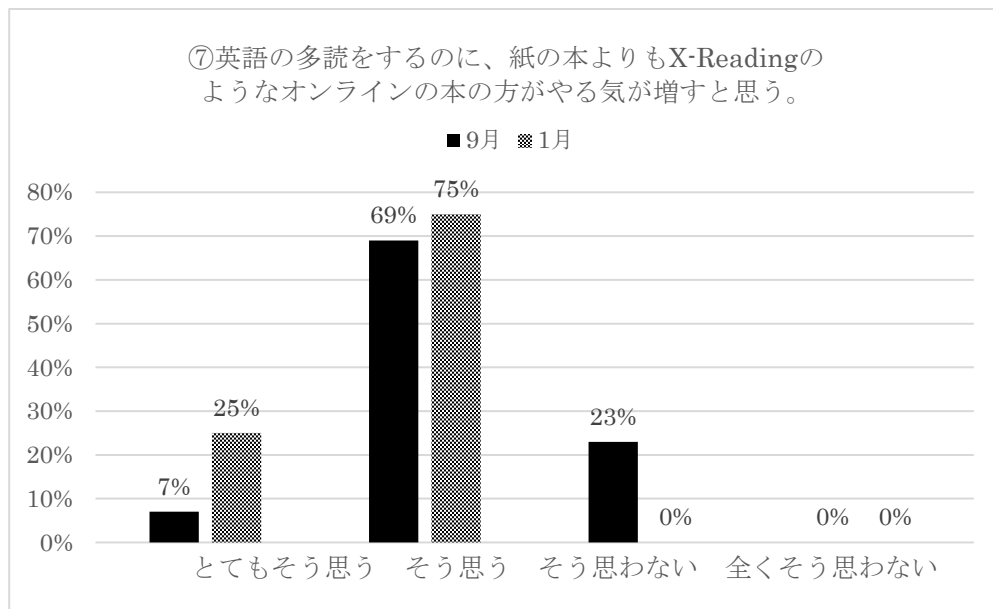
【資料 1-5】



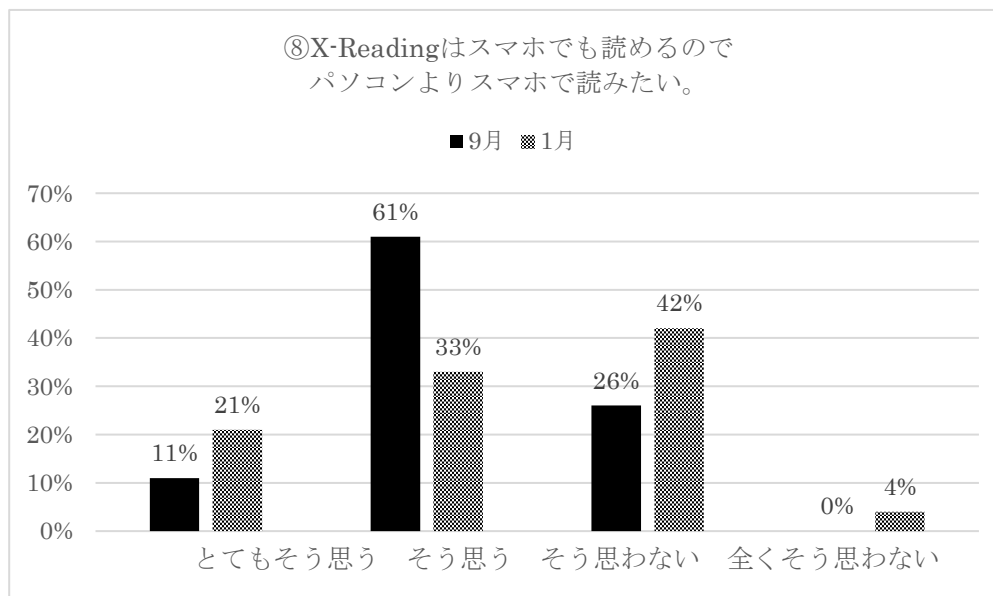
【資料 1-6】



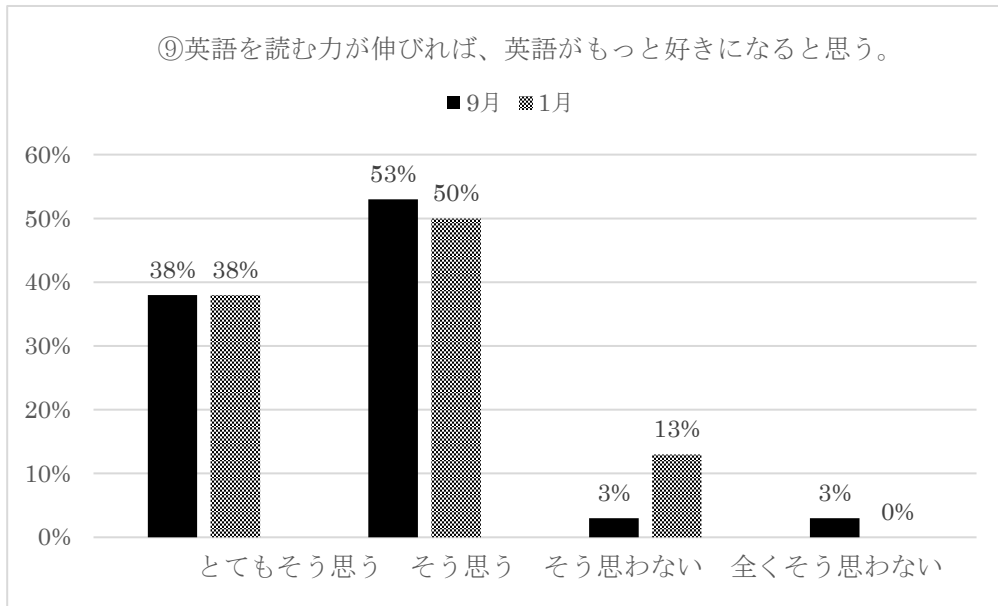
【資料 1-7】



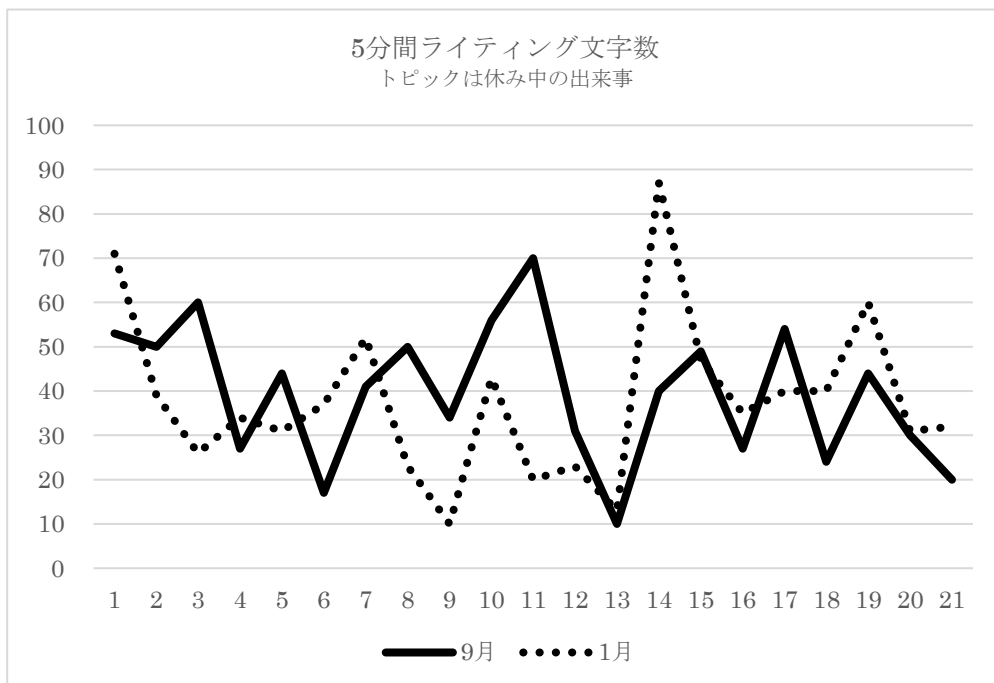
【資料 1-8】



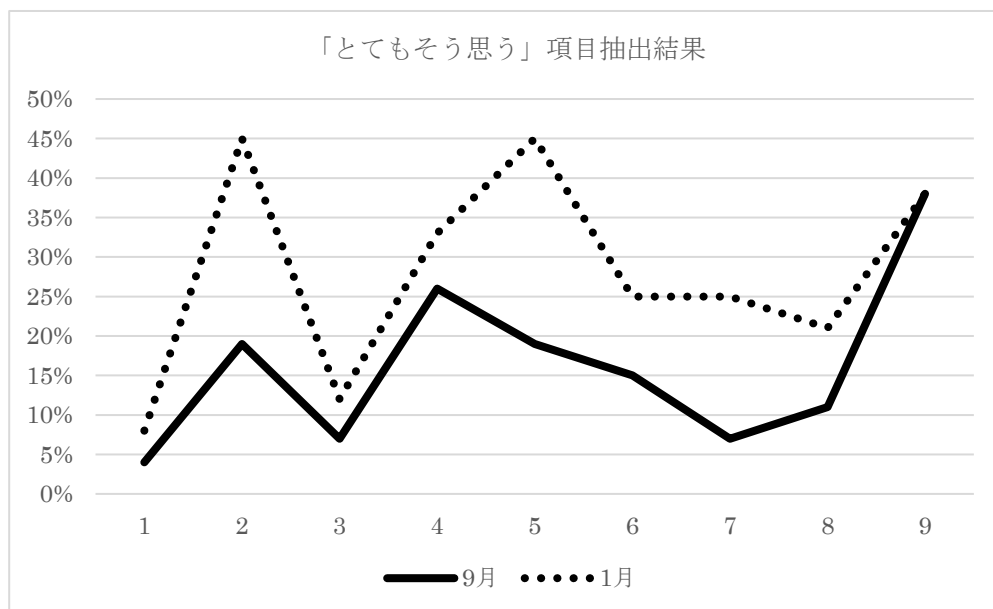
【資料 1-9】



【資料 2】



【資料 3】



【資料 4】

① X-Reading を利用した結果

- ・多くの英語の文献に触れることが出来て、英語に対してより親しみを感じることができました。
- ・普段、英語の本を読む機会がなく、最初は読むことがキツかったが、だんだん慣れていくと読みやすくなった。
- ・面白い話をたくさん読ませてもらった。自分の英語の能力によって異なるレベルを選ぶことができるから、とても便利だと思っている。
- ・今まで英語の本を読むことがなかったので、とても良い授業になったと思う。はじめは読むのに時間がかかってしまったが、徐々にスラスラ読めるようになり、少しは上達したと思う。
- ・始める前は何だこの授業は? と思いましたが、だんだんやっていくうちに楽しくなってきた。ストーリーを読んで行くうちに内容などを深く学べた。始めは楽な作品を選んでしたが、文学作品のほうがおもしろかった。もっと時間があれば、長い本にも挑戦してみたかった。
- ・この授業を始める前はわからないことが多かったし、書き方もきちんと分かっていなくて、最初は戸惑っていましたが、でも、回数を重ねるにつれて書き方も理解してきて、読むスピードも速くなったり、書く枚数も増えて行ったので、回数をこなすことは大切だなと思いました。今は、単語も前より覚えた数も増えて、ちゃんとやって来て良かったなと思いました。
- ・絵を見てどんな話を想定して書いていたが、単語を覚えていくうちに、少しだけ文章を読んで、理解できるようになった。スラスラ読めるようになりたい。

- ・利用する前は、英語の本を読む機会は全く無かった。利用してみて、非常に使いやすく興味深いものだった。音声付きだったので、発音を調べずに知ることができて良いと思った。これからも時間あるときは、X-Reading を開いてみようと思った。
- ・慣れるまで使いづらかったです。どうしても読むのに時間がかかってしまうので、授業内で1冊読み切るだけで終わってしまいました。翻訳しないと内容が分からないので大変でした。
- ・初めて触れる教材で上手く扱えるか心配だったが、思った以上に操作が簡単だったので、とても楽しく英語の本を読むことができた。終わり方（結末）が、微妙な本もいくつかあったが、それも含めて楽しむことができた。英語に触れる機会が多くなった。
- ・いろいろな本を読んで英語でこういう言い方をするのかなど、学べた。読んで英語が学べるので楽しかった。
- ・教科書を買わなくてよいので、お金がかからなくてよい。教科書だと気持ち的に強制的にやらされている気がして、パソコンの方が自分のやりたいタイミングで集中してできた。
- ・利用するまでは、英語で読むのがつらいなと感じていたが、利用してみると、楽しくて、もう1冊、もう1冊もっと読みたいと思うようになった。パソコンの方が読みやすいと思った。
- ・始める前は文章の意味などが理解できなかったが、やっているときなどは、理解するために辞書などを使い、結果、最初よりは理解できるようになった。もっと難しい作品にも挑戦したい。
- ・英語で文を読んだことは今までなく、初めて授業を受けた時、少し抵抗があった。初めて読んだ時は単語の意味も訳も分からなかったが、何度も読んで行くうちに、すらすらと読めるようになった気がする。今回の授業ではレベルの簡単な本ばかり読んでいたが、次はもっとレベルの高い、知っている本を読んでもみようと思った。
- ・英語の文章を読む気が起きるようになった。前より読めるようになった。
- ・英語で書かれている本に多く触れることができたのでとても良かった。大学図書館にわざわざ行って借りる手間もなく、自分のパソコンで簡単に読めるところもとても良いと思う。今年でも来年でも英語の一部のクラスのみではなく、他のクラスの人も利用できるようにするのは良いのではないのでしょうか。
- ・普段読まないような本を読むことで想像力が育った。さらにすべて英語で読むというのも普段では経験しないことなので新鮮だった。今までは単語の文をパッと見ただけで読めるはずがないと思っていたけど、案外読めるということがわかった。

② 英語で writing を行った結果

- ・英語でブックレポートを書くというのは、始めた当初はとても難しく感じていたが、なかなかできるようになったと思う。
- ・自分は昔から英語が苦手で、とくに writing が苦手だったけど、先生のアドバイスなどを活用したら前よりは書けるようになって良かったです。
- ・少しでも分かる単語が増えたと思う。一人称とか二人称とか現在形とか過去形とかを意識できるようになった。

- ・文章の文法など、たくさん知ることができて良かった。自然と文法を覚えられたので、違う英語の授業でも使えてとても良かったと思えたし、苦手意識があった英語をすらすらと書けていた自分に感動した。
- ・知識になかった単語を知ること、書くことができた。文章構成などを上手くできるようになった。
- ・自分の思ったことを英語にする力がついて、英語の文章を書くスピードが早くなった。単語を覚えることができた。
- ・一年生のときは、英語で論文を書くことがなかったので、今回論文を書いたことによって、どのように英文を書けばよいのかわかってきた。自分の力でたくさん英文をかけた時の達成感があった。
- ・文章を作るのが苦手でしたが、**writing** を続けていくうちにできるようになり、達成感があった。もっと難しい文学に、挑戦したい。
- ・英語は苦手です。全然書けませんでした。もう少し頑張ればよかったな、と思いました。
- ・**writing** をやってみて、最初は難しく感じたけれど、だんだんとできるようになった。結果、別の英語の授業の **speaking** でも良い影響になった。
- ・先生に聞かないとわからなかったけど、書いていくうちに、自分だけで書けるようになった。仕事でも役に立ちそう。
- ・段落構成を毎回書いていくうちに、文の書き方が上手になった。文法とか、普通の日本語を英語に変える能力が身についたと思う。
- ・英語が得意ではない方だったので、長い文章を書けるか心配だったけど、簡単な **writing** からやっていくことで、長い文も書けるようになってきたので良かった。
- ・英語で書くことを行った。自分の語彙と文法が上達した気がした。自分の英語のレベルに良い役割を果たしたと考えている。
- ・英語で書くことは考え方として日本語で書くことと一緒に思う。私にとって全部外国語だから、どうやって自分の思いを伝えることは最優先している。でもやはり、英語、日本語、中国語と混じったときもある。頭の中で分けるのは大変だ。
- ・書ける単語が増えた。

③ 自己成果

- ・英語が好きになった。
- ・おもしろい話をいっぱい読んでいただけでなく、自分の英語を読むことと書く能力が高まった。
- ・**writing** の成果がとくにあったと思う。はじめは簡単な **writing** からやったが、長い文を書くのを続けていたら、最後は A42 枚ぐらい書けるようになったので、少し上達したと思う。
- ・他の授業で、自分の行った出来事、行った場所を英語で発表する時、文章を上手くまとめられた。内容や、最後に結末などを簡単にまとめることができるようになった。
- ・英語に触れる機会が以前より圧倒的に増えた。少しは **writing** も上達したと思います。
- ・英語の本などに興味を持ち、読みたくなった。

- ・自分でも分かるほど、英語の文章を読む力がついたと思う。他の授業でも役に立っていることが何よりも嬉しいです。
- ・英語は難しく、自分には全くできないと思っていたが、やり方によってはできるんだな、と思えた。
- ・英語で書くことを行った。自分の語彙と文法が上達した気がした。自分の英語のレベルに良い役割を果たしたと考えている。